

～開発コンサルタントという仕事～

PE-0245

(Civil (Water Resources and Environmental) ケンタッキー州、コロラド州)

JSPE 理事 三野 史朗

0. プロローグ

2016 年、過去には1兆円を超えていた我が国ODA 予算は、およそ半分になりました（外務省ウェブサイト、一般会計ODA 当初予算の推移 より）。一方で、世界における日本のプレゼンスをさらに高めていくため、また、投資に見合う国益に資する開発協力を一層戦略的に実施していくため、政府は開発協力大綱を刷新するとともに、平和構築、環境・気候変動対策などグローバルな課題への貢献をさらに推し進めています。このような状況下、政府は2016 年を「ODA の飛躍的な拡充の年」と位置づけ、開発協力をさらに力を入れています。

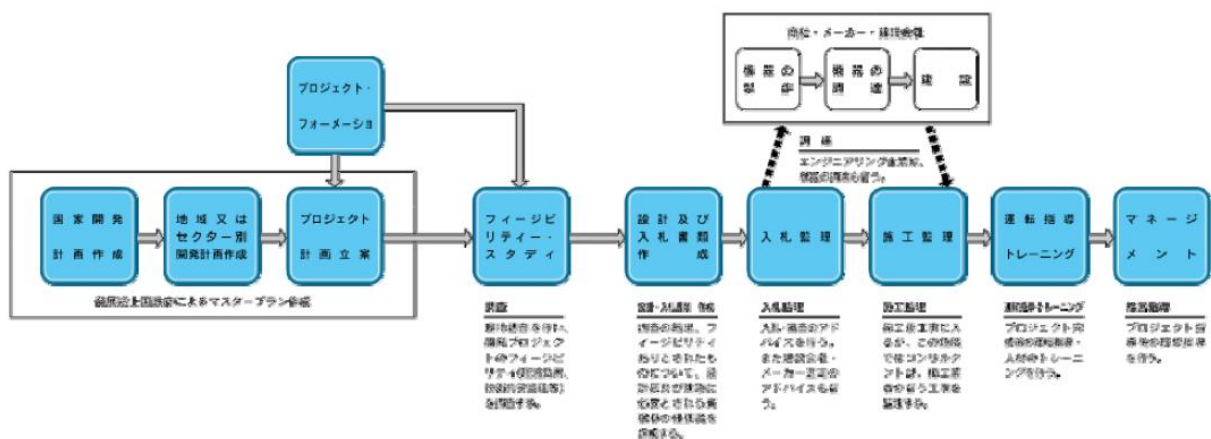
このODA 外交の最前線には、建設会社や商社の方々とともに、「開発コンサルタント」と呼ばれる人たちがいます。会員の皆様にもこの「開発業界」に身を置かれている方々がたくさんおられると思いますが、私もその一人で、ゼネコンで国内の施工を経験した後、日系建設コンサルティング会社に所属し、水資源・環境保全をベースに、開発コンサルタントとして約10 年間開発業務に従事してきました。

1. 開発コンサルタントの役割

開発コンサルタントの多くは、エンジニアリングコンサルティング会社（主として建設コンサルタント会社）の海外部門に属している土木・建築・機械・電気等のハード部分の技術者ですが、最近は教育・医療・環境・森林保全・食料確保等のソフト部分の専門家、そして女性が多く活躍しています。

開発コンサルタントは、日本政府のODA 実施機関である独立行政法人国際協力機構（以下、JICA）をはじめ、現地政府や国際機関（世界銀行、アジア開発銀行、国連関連機関等）から調査や設計、計画業務などを請け負います。

例えば、飲用水のプロジェクトでは、浄水場や配水池など水道施設の設計が必要になりますが、ここには水道施設の専門家が入り、業務にあたります。水道施設の設計には設計諸元（給水量、人口予測、水源能力など）が必要ですので、ここには統計の専門家、社会開発の専門家、水理地質の専門家、測定の専門家等が入ります。また、この施設の財務・費用便益分析を行うにあたり、経済の専門家が入ります。設計のあとは施工・調達のコントラクター選定を顧客に代わって行うことが多く、調達の専門家が配置されます。このあと、施工段階では土木施工の専門家が現地に常駐するとともに、施設の運営や住民啓蒙のため、社会・教育系の専門家も配置されます。竣工数年後には、施設がうまく運用されているかを確認するため、評価分析・モニタリングの専門家が派遣されます。そして、これら全てをマネジメントするのが総括技術者の役割です。このように、開発コンサルタントが海外で行うコンサルティング業務は、様々な専門家が一体となって行うことが多く、段階に応じて頻りに現地調査を行わなければならないため、1 年の半分以上は日本におりません（上記は一般的な施設案件（ハード）の例ですが、一人で行う業務や、技術指導（ソフト）に特化した案件もあります）。様々な専門家が多種多様な案件に従事するため、いろんな分野の人材が必要です。にも関わらず、業界は慢性的な人手不足だと感じています。ご興味がある方のご参加をお待ちしております。



図：ODA プロジェクトの流れ（イメージ）

（出展：（一社）海外コンサルタント協会 <http://www.ecfa.or.jp/japanese/consul/>）

2. 開発コンサルティングの魅力

とは言っても、「開発コンサルタントにどんな魅力があるのか」というご意見もあると思います。そこで、私が個人的に考える開発業界の魅力を以下でお伝えしたいと思います（極めて私見です）。

2.1 外から見る日本

日本を客観的に見る事が出来る、と言うのは開発コンサルティング業務の魅力の一つかもしれません。業務上、対象国の法律や制度、設計基準などを調査することがよくあり、日本と比較を行います。いろいろな意見があるとは思いますが、このように**日本の制度を他国と比較したり、日本が海外からどのように見られているのかを知ったりして、客観的に見ることで、日本が抱える課題とともに、日本の良い面を感じ、考える機会を得られる**のは、素晴らしいことであると思います。

2.2 海外の文化・風習・食べ物

仕事で海外の文化・風習・食べ物に触れる事が出来るのは、好きな人にはたまらないと思います。嫌いな人にも逆の意味でたまらないと思いますが。。。いろんなことがストレスにもなりますが、異文化に触れること、外国人とチームを組むこと、厳しい環境でプロジェクトを行うことは、同時に良い刺激にもなります。

2.3 日本代表であるという使命感

特に南・東南アジア圏での日本に対する評価は極めて高く、世界有数の発展した国であり、作る製品は高品質・良耐久性であると評価されていると同時に、**我々コンサルタントも日本のプロジェクトというだけでものごく期待**されます。アフリカ地域でも、日本と言う国を詳しくは知らなくとも、交通機関を支えるミニバスや、情報通信機器などは日本製であふれ、日本の製品を持つことは金持ちのステータスだとさえ言い切る人もいました（最近では、特にアジア地域において、中国や韓国の安い製品に押され気味ではありますが）。

このような評価は、先人が築き上げてきた国際業務のみならず、国内の建設・製造分野も通じた我が国の信用そのものです。我々開発業界に関わる技術者は、このような先人の努力を傷つけないよう、さらに、日本のプレゼンスをもっとアピールできるよう、日本代表で外交の最前線にいるという使命感を感じながら、業務を

施することになります。

食べ物



郷土料理「チェブジェン」(セネガル)



家庭料理「ドロワット」(エチオピア)



イナゴ? (ラオス)



ミャンマーカレー

町並み・風景



カトマンズ-バドラプール路線から見たヒマラヤ山脈
(ネパール)



ライチャウー中国国境の雲に隠れる山々
(ベトナム)

2.4 国づくりの一端を担う責任感

対象国の政策に沿い、**その国がなりたい国への国づくりを支援することや、国家政策に対する助言の後押し**データを作成したり、水セクターの政策立案に従事したりすることが出来るのも、開発業界の魅力の一つでしょう。過去に従事した案件が地図に載っていたり、施設を数年後に見に行ったらうまく運営されていたりと、喜びもひとしおです。



メコン川に沈む夕日 (ラオス)



サハラ砂漠に行く (エチオピア)

文化・風習



イスラム教 金曜礼拝 (セネガル)



コーヒーセレモニー (エチオピア)



バゴダ (寺院) (ミャンマー)

3. 日常生活にきたす影響

一方で、業界独特の悩みもあります。開発コンサルタントの多くは、1年の半分以上を海外で過ごします。よって、**家族やパートナーの理解・協力がなければ、仕事が出来ません**。特に子育て世代（私もですが）は、海外出張中はパートナーに子育てを頼りきってしまうことになってしまい、パートナーの負担が激増します。共働き家庭では、パートナーの働き方を制限することにもなります。会社によっては、このようなライフイベントを加味して人材配置をしてくれる会社もあるのですが、海外出張に行かないと売上げがあがらないという業務の性質上、相当体力がある会社でなければこのように配慮してもらうのは難しい状況です。WLB（ワーク・ライフ・バランス）では、どこかで折り合いをつける必要があり、業界の誰もが悩むところであると思います。家族には頭が下がる思いです。あと、個人的には、もう何百回も乗っていますが、飛行機が大嫌いなので、なんとか飛行機以外の乗り物が開発されないか待ち望んでいるところです。

4. 開発コンサルタントとしてのPE

現時点では、残念ながら、開発業務を行ううえでPEという「資格」が役に立ったと思えることはあまりありません。特に日系の顧客の場合、「技術士」が評価対象資格ではあるものの、PEは企画書提出の際の加点対象資格とはなりません。一方で、**PE試験を経て得たマネジメントや契約管理の知識は、海外業務と国内業務で大きく違うことの一つであるため、業務を進めるうえで役に立っている**と感じています。さらに、実務で目に見える有益性はなくとも、名刺交換等で「PE」であると名乗ると、特に欧米系のコンサルティングファームのエンジニアとはその後のやり取りがスムーズになったり、信頼を得る時間が短縮されたりと、心証に与える影響はあります。また、PEとは関係ないですが、よく開発業界の人材要件に「語学力（英語力）」等が書かれているのを見かけますが、個人的には、開発業界で必要とされるレベルの英語力は「気合い」で十分乗り切れると思っています。

5. エピローグ

「米国PE」と書かれた名刺を持ちODA業務に従事することは、PEとして、そしてODA外交に携わる技術者として、という二つの大きな責任を感じています。たくさんの国に行ってきましたが、世界は本当に多様です。この多様な世界で、PEとしての知識と技術を駆使しながら、業務を成功に導き、対象国の発展に寄与し、我が国の国際貢献のみならず、PEの普及や地位向上に役立てればと思います。

また、この仕事を理解して支えてくれる家族に感謝します。